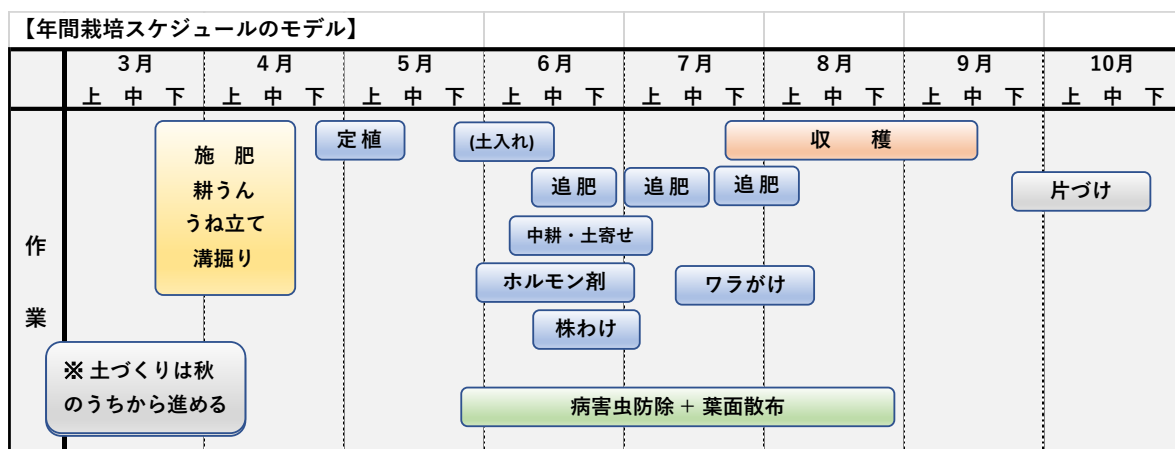


# ジュース用トマト 栽培マニュアル

2023年3月 松本園芸推進協議会

## 1 年間栽培スケジュール ～適期作業を心掛ける～



## 2 ほ場の準備 ～栽培に適したほ場選びと排水対策、土づくり、施肥～

- 排水性、保水性がよく、作土層の深いほ場を選ぶ。雨が降った後1日以上水たまりが残るようなほ場は、管理機などでほ場の周りに溝を掘り、排水の良いほ場を作る。
- たい肥など有機物を施用して土壌の団粒化を促す。たい肥の施用量は2 t / 10 aを目安とする。
- 施肥 収量目標8～10 t / 10 aの施肥の目安

### ア【省力栽培（基肥一発施肥）体系】

肥料名	施用量 (kg/10a)	施肥時期		成分量(kg/10 a)		
		基肥	追肥	窒素	りん酸	加里
ジュース用トマト一発肥料 (20-12-10)	100	100		20	12	10
BM苦土重焼燐(0-35-0)	20	20			7	
けい酸加里プレミアム(0-0-20)	40	40				8
合計				20	19	18

### イ【省力減肥（基肥一発うね内施肥）体系】

うね内施肥（局所施肥）技術を導入することで、化学肥料施用量を20%削減できる。

肥料名	施用量 (kg/10a)	施肥時期		成分量(kg/10 a)		
		基肥	追肥	窒素	りん酸	加里
ジュース用トマト一発肥料 (20-12-10)	80	80		16	7.2	8
BM苦土重焼燐(0-35-0)	20	20			7	
けい酸加里プレミアム(0-0-20)	30	30				6
合計				16	14.2	14

[参考] 実証ほ場における収量調査結果（10株当たり）

試験区：生分解性マルチ+ジュース用トマト一発肥料マルチうね内施肥（80 kg/10 a）

慣行区：ポリマルチ+ジュース用トマト一発肥料全面全層施肥（100 kg/10 a）

調査日	8月31日			9月14日		
	良果	不良果	良果の割合	良果	不良果	良果の割合
試験区	9,690g	3,654g	72.6%	11,290g	4,722g	70.5%
慣行区	6,860g	2,068g	76.8%	17,480g	7,344g	70.4%

※収穫した果実の良果の割合は試験区と慣行区でほぼ同等

### 3 定植 ～適正な時期に定植する～

#### (1) 適期定植

- ・定植の10日前までにほ場づくりを完了する。
- ・出荷時期が決まっている（9月15日頃）ので早めの定植を心掛ける。霜の心配がなくなつてから、5月中旬までを目標に定植する。

(2) うね 定植床の幅90 cm、高さ25～30 cm程度のかまぼこ型、通路幅は1 m前後  
株間は50 cm前後

(3) マルチ 有翹アブラムシ防止のためシルバーストライプマルチや銀黒マルチなどを使う。  
生分解性マルチを使用すると、ポリマルチに比べ栽培終了後の片づけに要する時間がおよそ4分の1となり、作業人員を削減できる。

作業の内容	株拔取り	残さ 持ち出し	通路マルチ 除去	マルチ除去	合計
生分解性マルチ	150分	0分	0分	0分	150分
ポリマルチ	150分	245分	150分	90分	635分

※実証ほでの作業における実測値

(4) 定植苗の葉数 普通栽培では本葉4～5枚、改良マルチ栽培では3.5～4枚

### 4 中間管理 ～しっかりとした樹作りをして着果数を確保する～

#### (1) 着果ホルモン剤の処理

第1花房を確実に着果させ、果実の肥大を早め、草勢をコントロールして過繁茂を防ぎ、上位花房の着果を安定させる。

#### (2) 株分け（枝分け）

一時的に草勢を弱め着果促進を図るとともに、株内の採光や通風を良好にし病虫害の発生予防や株の急な倒伏による日焼け果の発生防止効果がある。

側枝をうねの両側に開く。6月下旬と7月上旬に行う。

茎葉が折れにくくなる曇天の午後に行うのが良く、作業後は傷ついた茎葉を保護するため殺菌剤の散布を行う。

### (3) 追 肥

追肥栽培体系の場合、品種や初期花房の着果や果実の肥大、葉色を見ながら、窒素と加里を 10 a 当たり各 4～6 kg を数回に分けて施用する。

基肥一発施肥体系の場合、追肥作業を省力化できる。

### (4) かん水

草勢維持と果実肥大促進、尻腐れ果対策に効果が高い。

梅雨明け後、土壌が乾燥する少し前から行う。収穫期に著しく土壌が乾燥してからのかん水は裂果の発生が多くなるので注意する。

### (5) 敷きわら

果実の汚れや腐敗防止、土壌の乾燥や雑草、病害の発生を抑制する効果がある。

茎葉が倒伏する前（株分け作業の前後）に行う。

## 5 ロス果を減らす

### (1) 日焼け果

果面に強い日射しが当たり、果実温度が 40℃以上の高温に一定時間以上さらされ、一時的な脱水状態になり発生する。

適切な株分け作業により果実を茎葉で均一に覆うとともにその後の草勢維持を図る。リーフカバーが十分でない場合は、稲わらや枯れ草、遮光資材等で果実を覆って直射日光を遮る。

通路の敷きわらやかん水を行い、土壌水分を確保する。

### (2) 尻腐れ果

果実内のカルシウム（石灰）欠乏が原因（カルシウム自体は水に溶けにくく根からの吸収が遅いため果実で不足しやすい）。高温乾燥や窒素過多により多発しやすい。

根が広く深く発達できる土づくり、カルシウム剤の葉面散布を行う。

### (3) 裂 果

乾燥後の急激な降雨やかん水による土壌水分の急激な増加などにより、果実が水分を過剰吸収し、内部から膨らむ力に果皮が耐えきれず裂けることで発生する。

土壌の物理性改善により土壌水分の変化を少なくし、根の発達を良くする。

果実が直射日光にさらされるのを防ぎ、果皮の老化を抑制する。

こまめな収穫を行う。

## 6 収 穫

果色を確認しながら、完熟果を、へタを取って収穫する。加工会社(パッカー)の提供する出荷箱に 20kg 詰めとし、指定の集荷所へ持ち込む。

盛夏期であり日中の作業は労働負担が大きいので熱中症に注意する。